

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320159

研究課題名(和文) 中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的正当化

研究課題名(英文) Mythological and Historical Legitimization of Princeship in Medieval West

## 研究代表者

江川 温 (Egawa, Atsushi)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：80127191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：西欧カトリック世界において、王権の正当性についての認知の根底には、古い血統カリスマの観念が存在していると思われる。キリスト教改宗後は、そこに神の選びというイデオロギーが上塗りされた。他方でローマ文化との接触により、古典古代の物語や旧約聖書の登場人物からの系譜論が血統カリスマの感覚に重ねられることにもなった。これに対して、中世盛期以降は、古典古代の政治学、法学の影響によって、被治者の合意に基づく支配、あるいはかつてローマ皇帝が保持したとされる絶対的な主権という観念が王権の正当性に影響を及ぼし始める。

研究成果の概要(英文)：There was the old, pre-Christian idea of charisma by sacred blood at the base of recognition of royal legitimacy in the medieval Occident. After the conversion to Christianity, the new concept of "choice of God" had been coated there. On the other side, the peoples accepted the myths of origin fabricated from the Old Testament or the works of the classical period and lay them on the old concept of sacred blood.

From the High Middle Ages, the new ideas began to influence the royal legitimacy. They were brought from the studies on politics and jurisdiction of classical period. We can give as example the idea of the lawful government based on the consensus of governed, or that of absolute sovereignty of onetime roman emperor indispensable for lawful order.

研究分野：西洋史

キーワード：正当性 カリスマ キリスト教 君主権 血統権 神の選び

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、以前から中世フランス王国の共属意識に関心があり、いくつかの試論的な考察を行っていた。またそれをヨーロッパ意識の形成との関係でどのようにとらえるべきかについても検討していた。その中で、文化的宗教的統一体である中世カトリック世界において、各エトニの核を構成していくものは、A・D・スミスの言う「王朝的神話力」であると考えようになり、王朝の神話について各国の比較研究の必要性を強く感じるようになった。

他方で代表者は、中世フランスの国王および王族の記念の具体的な表現である王墓、王族墓にも関心を寄せ、論文「中世フランス国王の墓所と墓」(江川・中村共編『死の文化誌 心性・習俗』、昭和堂、2002)などを発表していたが、この問題も上述の王朝の神話に関連して発展させることが可能であると考えるに至った。

### 2. 研究の目的

中世ヨーロッパの諸王国あるいは諸領邦国家の構成員にはどのような共属意識があったか、それはどのような要素からどのように形成され、どのように変動するのかという問題の一環として、王権、王朝が持っていた「王朝的神話力」に注目し、それらの神話的、歴史的正当性主張の創造、流布、活用を比較検討し、それぞれの特性と段階的発展を捉えることを目的とした。比較の対象となる王国および領邦は、フランス、イングランド、カスティーリヤ、ハンガリー、ブラバント公領とした。二つの中核的な王国(フランス、イングランド)、東西の辺境(カスティーリヤ、ハンガリー)、独立的な領邦国家群(ネーデルランド)という形で多様性を確保するためである。

### 3. 研究の方法

メンバーのうち江川がフランス王国、朝治がイングランド王国、大内がカスティーリヤ王国、鈴木がハンガリー王国、青谷がネーデルランドを担当した。各メンバーがヨーロッパに研究協力者を確保し、意見を求めた。

比較のための分析項目について討議した後、1年目から3年目までは年5~6回の研究会を開催した。そこでは各メンバーおよびゲストスピーカーの報告を受けて討議を行った。4年目は冊子体の報告書作成に集中した。

### 4. 研究成果

西欧中世における各王国および領邦の君主権の正統化については、最深部における傾向性と3つの歴史的な契機を措定することができる。

まず最深部にはキリスト教以前に遡る血統カリスマへの信仰が持続している。インド・ヨーロッパ語圏においては王権は祭司的、

戦士的、生産者的な三つの機能を有しているとされるが、この機能は基本的に血統によって伝えられるとされる。

これに対して、第一の契機としてはカトリック・キリスト教会が付与する、神に選ばれた王侯、あるいは王侯家門としての権威がある。王の即位儀礼(最も代表的なものとしては、塗油による聖別)や権票(王冠、王剣など)はそのようなイデオロギーと結びついている。王族やその先祖の中に聖人を擁することもこの契機に含まれる。

第二の契機としては、ある王国ないし領邦王統とその民を、聖書あるいは古典古代の歴史文学の登場人物の末裔と見なして、歴史による権威を付与することである。最も有名なものとして、トロイア出自の物語を挙げることができる。またハンガリー王統のフン族出自の物語などもこの一種とみられる。

第三の契機としては、中世盛期の政治的、文化的環境から生まれてくる支配の理念による正統化を挙げることができる。被治者の合意による支配者、キリスト教的正義の統治の実現者といった言説、ローマ的な絶対主権の主張、イスラーム世界との対抗関係における西欧の代表者、あるいは防衛者としての立場の主張などを挙げることができる。

各王国の王や領邦君主の支配の正統化とは、これらの契機が複雑に絡み合ったものであり、政治状況に応じて多様に変形する。その詳細については、冊子体による報告書『中世カトリック圏君主権の神話的・歴史的正当化』にまとめた。内容は以下の通りである。

江川温は「西欧のリーダーと「皇帝」：中世フランス王権の夢-近年の研究の紹介と考察-」で、13世紀以降のフランス王権とその周辺には、フランス王権がドイツの皇帝に代わって西欧のリーダーとなるべきであるとする思想があり、それが十字軍思想と深く関連していたことが近年の研究で明らかにされていると指摘している。そしてこうしたリーダー意識はさらに、神話化されたシャルルマーニュのイメージで支えられていたと推定している。

朝治啓三は「ノルマンディ公のタイトルロロからジョンまで」で、10世紀から12世紀までのノルマンディ公のタイトルの変化を追い、それにノルマンディ貴族による推戴や選出、王からの領地と位の授与、オマージュの有無の問題を組み合わせる形でこの領邦君主の権力の正統化の論理の変化を考察した。ノルマンディ公権は10世紀以来、外敵からの防衛のリーダーとして権力の正統性を確保しており、王権からの授権の論理が登場するのはアンリ・プランタジュネの臣従以降であると結論する。

大内一は「13-15世紀カスティーリヤ王国における王権の正統化とプロパガンダ」で、1980年代以降のカスティーリヤ王権の正統化に関する研究を網羅的に紹介している。カスティーリヤにおいては14世紀後半のトラ

スタマラ内戦とエンリケ2世の登位によって正統性の危機が生じた。このため15世紀には王権の神聖性が強く喧伝された。しかし「公共善」のために働く君主の理想は、王権の正統化に機能するとともに王権を抑制しているという。

鈴木広和は「ハンガリー国王マチャーシュ1世の正統性と適格性」で、古い王朝と血縁がなく、貴族たちの選出によって王となったマチャーシュが伝統的な正統化アイテム（聖王冠、天使による戴冠のモチーフ、聖ラースロー崇敬、キリスト教世界防衛者としての適格性）をいかに獲得していくかを論じている。そこでは異教徒と戦う聖なる君主としての聖ラースローの後継者としての位置づけがきわめて大きな意味を持っていたように思われる。

青谷秀紀は「ヘクトルの仇を討つもの-中世後期ネーデルランドの“トルコ人”：トロイア出自説をめぐる予備的考察-」で、フランク人のトロイア出自説話における「フランク人-トルコ人同祖説」が15世紀末になっても『ブラバント年代記』において維持されていた理由を問う。青谷は15世紀にもオスマン・トルコ人をトロイア人の末裔の一つと見なす見方があったことを示し、現実のトルコ人たちの傲慢な「騙り」を真に高貴なトロイアの末裔たるヨーロッパの王侯の十字軍精神と対比する戦略がそこに込められていると推定している。

なお、上山益己がわれわれの研究会でゲストスピーカーとして報告し、討議に基づいて改訂した内容を合衆国の学会で報告しているので、これについても言及しておく。上山は中世前期の北欧やイングランドで形成された「聖なる王」のモチーフが、11、12世紀のフランスの諸侯家門についての歴史叙述に「聖なる侯」のモチーフとして取り入れられたとしている。きわめて興味深い見方である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① 青谷秀紀、The Papal Indulgence as a Medium of Communication in the Conflict between Charles the Bold and Ghent, 1467-69”, in: *Political Order and Forms of Communication in Medieval and Early Modern Europe*, Y. Hattori (ed.), Viella: Roma, March 2014, pp. 191-206.
- ② 青谷秀紀「12世紀フランドルの修道院説教史料と歴史アイデンティティ」、『駿台史学』151、2014、23-52頁。
- ③ 朝治啓三、「帝国で読み解く中世西欧カトリック世界の構造—神聖ローマ帝国、フランス王国、アンジュー帝国—」『西洋史学』

249号、2013、20-32頁。

- ④ 鈴木広和、Some Aspects of Descriptions of the Turks in. 16th Century Hungary-Rubigallus and Dernschwam-, *Mediterrán és Balkán Fórum*, 18. szám (VII/2.), 2013, pp.2-6.
- ⑤ 青谷秀紀、Mechelen’s Jubilee Indulgence and ‘Pardon’ in Burgundian Political Culture”, *Proceedings of Medieval Identities: Political, Social and Religious Aspects. The Eighth Japanese –Korean Symposium on Medieval History of Europe, August 21, 2013 –August 22, 2013, Tokyo, Japan*, pp. 28-37.
- ⑥ 青谷秀紀、「フランドルと英仏」朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編『中世英仏関係史1066-1500』創元社、2012、196-219頁。
- ⑦ 朝治啓三、「中世英仏関係における境界都市ボルドー」、田中、高橋、朝治編『境界域からみる西洋世界』ミネルウァ書房、2011、175-200頁。
- ⑧ 大内一、「クエンカ都市法における判事裁判と神明裁判に関する一考察」*Estudios Hispánicos*, 2011, pp.73-91.
- ⑨ 青谷秀紀、「赦しのポリティクス -中世後期ネーデルラント都市の贖宥とブルゴニュ公-」『清泉女子大学紀要』59巻、2011、21-35頁。

[学会発表] (計 9 件)

- ① 青谷秀紀「中世後期ネーデルラントの出自神話とアイデンティティ —君主・領邦・都市—」、歴史学研究会ヨーロッパ中近世史合同部会・早稲田大学イスラーム地域研究機構第1回合同シンポジウム「歴史叙述とアイデンティティ —ヨーロッパ史研究とイスラーム史研究の対話—」、2014.02.01、早稲田大学。
- ② 朝治啓三、「一国完結史から関係史へ」、「フリードリヒ2世とヘンリ3世時代の英独関係」東北大学西洋史研究会大会、2013.11.10、立教大学。
- ③ 朝治啓三「1259年パリ条約以後王子エドワードのボルドー政策—領有者プランタジネット家と都市コミュニンのコミュニケーション—」日本西洋史学会63回大会小シンポジウム、2013.05.12、京都大学。
- ④ 青谷秀紀「伯権力衰退期のフランドルと英仏王権」、西洋史研究会大会シンポジウム「西欧カトリック世界の帝國的構造」、2013.11.10、立教大学。
- ⑤ 青谷秀紀、Mechelen’s Jubilee Indulgence and ‘Pardon’ in Burgundian Political Culture, *Medieval Identities: Political, Social and Religious Aspects. The Eighth Japanese – Korean Symposium on Medieval History of Europe, August 21, 2013, Keio University (Tokyo)*.
- ⑥ 鈴木広和、A magyar kozepkorral kapcsolatos japan torteneti kutatásokrol

(kulonos tekintettel a tatarjarasra es annak hatasara),2013.08.26, A Balassi Intezet es hungarologiai konferenciaja, Balassi Institute (Hungary).

⑦鈴木広和、「ケーザイ・シモンの年代記とフン=ハンガリー同族説」、ハンガリー学会、2013.02.16, 大阪大学。

⑧青谷秀紀, The Papal Indulgence as a Medium of Communication in the Conflict between Charles the Bold and Ghent, 1467-69,2012,07.10,International Medieval Congress, University of Leeds (England).

⑨上山益己、「Saint Princes of Northern France in the 11th and 12th Centuries", at MAP(The Medieval Association of the Pacific)2012.3.31, Annual Conference, Santa Clara University.

[図書] (計 1 件)

①朝治啓三 (共編著)、『中世英仏関係史 1066-1500』創元社、2012、327頁。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/egawakaken/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

江川 温 (Egawa Atsushi)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：80127191

### (2) 研究分担者

朝治 啓三 (Asaji Keizo)  
関西大学・文学部・教授

研究者番号：70151024

大内 一 (Ouchi Hajime)  
大阪大学・言語文化研究科・教授  
研究者番号：20185193

鈴木 広和 (Suzuki Hirokazu)  
大阪大学・人間科学研究科・准教授  
研究者番号：80273738

青谷 秀紀 (Aotani Hideki)  
明治大学・文学部・准教授  
研究者番号：80403210

### (3) 連携研究者

松尾 佳代子 (Matsuo Kayoko)  
所属なし  
研究者番号：40551924